特集にあたって

梅沢　豊

「クオ・ヴァディス」――ご存じシェンケーヴィチ作の歴史小説のテーマである．これは，初期キリスト教徒が，ローマ皇帝ネロから受けた迫害を，作者の祖国ポーランドの苦難に擬して描いた作品である．本誌の特集テーマとしての「クオ・ヴァディス」は，ORの苦難を言外に含んでいる．組織を取り潰され，システム部門などに吸収されてしまった，多くの企業のOR実践家の心情，ひいては，OR全体の厳しい現実を意識して，このテーマが選択された．

原典は，ラテン語訳聖書のヨハネ伝で，ユダに売られたイエスとの別れ際にペテロが言った，「クオ・ヴァディス・ドミネ」（汝，いずこへ行き給う）である．もう40年以上も前のことになるであろうか．この小説が映画化され，日本でも評判になった．「クオ・ヴァディス」が日本語になった．呼格に「時代」とでも入れるのがよいのか．「クオ・ヴァディス・時代」，すなわち，時代は，どこへ行こうとしているのだろうか．われわれORは，どちらへ進んだらよいのだろうか．これが本特集のテーマの意味である．

「中長期的観点から，ORがかかえている根本的な課題を明確にするとともに，ORおよび日本オペレーションズ・リサーチ学会が今後進むべき道を検討せよ」との理事会からの諮問を受けて，OR基本課題検討委員会が発足したのは，91年度であった．この委員会の審議の基調をご理解いただくために，以下に，92年度末に同委員会から理事会に提出された中間報告書の主要部分を抜粋して示す．なお，92年度の委員は，大村雄史，小池清，常盤晋吾，原野秀永，森雅夫（アイウエオ順，敬称略），および筆者の6名であった．

「最近のORは，機関誌の特集号のテーマの多様さが端的に示すごとく，手法的にも，また適用領域的にも，非常に多岐にわたっているうえに，それぞれの分野ごとの事情もさまざまであるので，本委員会として現時点では“ORの現状”について結論的な判断を述べうる段階には至っていない．しかし，主たる適用の場である企業でのOR活動が，かつての栄光に比較して，かなり危機的状況にあるという点では，委員の意見はほぼ一致した．事実，多くの賛助会員企業で，ORセクションはすでに消滅したか，消滅の危機に瀕している．その一方で，大学等の研究教育機関におけるOR研究の多くは，この現実とは遊離したまま，主に数理科学の論理の枠内で，ひたすら理論的高度化をめざす展開を強めているのである．」

要するに，ORの実践と理論研究が，前者は消滅の危機に瀕しているのに，後者は前者からのフィードバックを失ったまま，ますます高度化していき，それがまた実践現場でのORをいっそう孤立無援にしている，というような悪循環を引き起こして，両者のアンバランスが拡大していくばかりなのである．

92年度からは，基本問題研究部会が発足し，上記委員会で提起された諸問題の研究と討議を継続してきた．特に，93年度になってからは，この研究部会は，多数のメンバーの新規参加を得て，主に，企業におけるOR実施の今日的諸問題に関し，中核的存在といわれる何社かの企業の具体的事例報告をもとに，相当つっこんだ討議を行なってきた．この討議の過程から生まれてきた3つの論文をまとめたのが，本特集である．

とりわけ企業人の場合には，本音を文章にしにくい事情も少なくなかろう．それにもかかわらず，ORを想い，ORに期待すればこそはじめて言いえたような，思いきった発言も散見される．行間をご賢察くださるようお願い申し上げる次第である．

ご意見を求む

1993年12月号の特集「OR普及へのカギ」，および本号の特集において，ORの現状に対して大いなる問題が提起されております．これらに関して積極的なご意見を編集委員会宛にお寄せくださるようご案内申し上げます．いただいたご意見を編集委員会で整理した上で，本誌に紹介させていただきます．整理の都合上，ご意見は3月末日までにお寄せください．OR誌を活発な意見交換の場としたいと考えています．（OR誌編集委員会）

© 日本オペレーションズ・リサーチ学会．無断複写・複製・転載を禁ず．